

るに当っては、過去における成敗の歴史をよく調べあげて、その歴史の上にならなくて、前の失敗を繰り返さないように、**「前者の轍」**を踏まないようにしなさい、という有難いご注意だと思って私はお話を伺いました。

新産都市は生きている

高原農業開発ということは、考えてみますと、今日では世界的な食肉不足という事情があるし、さらに総合農政といわれる農業政策の中の唯一の出口であり、玄関先であると思えます。こう考えてみると高原農業開発には非常に政策としての客観的な必然性があると思われるのです。しかし新産都市のことを考えた場合でも、新産都市には客観的な必然性はあった、今日いわれている過疎・過密の解決策としては、恐らく唯一の政策ではないかと思われるような客観的な必然性があったと思うのです。それにもかかわらず新産都市は足踏みをしました。政策に客観性があるというだけでは政策は転がっていかないといいこと。客観性のある政策をその方向に転がしてゆくのは人間の努力だと思えます。それにいたしましたも引き合いに出された新産都市は、確かに長い期間にわたって足踏みをしすぎたと思えます。今日、世間でもうあれは過去のものになつてはありません。当初指定になったのは十三地区でしたが、その後指定後の間に秋田県が仲間入りし、昨年は島根、鳥取の中海地区が仲間入りし、今日では十五地区になっております。関係県が十七であります。

今度の新全国総合開発計画の中で、新産都市の精神が薄れてはいないかということ、関係十七県の知事が集まり、それぞれの県出身の国会議員さんたちにお集りをいただいで、暮には新産都市の巻き返しを試みまして。自治大臣も出席し、大いにひとつやろうという確約をされました。大蔵省の財政制度審議会では、新産都市の嵩上げ補助率アップをやめようではないかと言いましたが、これは自治省の地方制度審議会、地方開発の決め手になる新産都市の特別嵩上げをここでとりやめるとはなにごとかということ、巻き返しをいたしました。新産都市は決して影が薄くなったわけではないのです。

高まってきた、工場進出の気運

わが熊本県の新産都市有明・不知火地域はその一つの眼目になった有明製鉄が撤退しまして、これに代ってこの地域の新産建設のけん引力、機関車の役割りを果たす工場の進出を求めていたわけですが、ようやく昨年の暮れに、三井アルミに関連した不二サッシが長洲に出てくるということが決定しましてから、さらに関連産業の進出の引き合いもあるということで、どうやら新産都市が動き出してくる気運にあると思えます。あの地域に立地しました松下電器も一期工事を終え、現在、二期工事が進行中です。さらに第三期工事をやりたいということ、用地の取得に現在とりかかっているところ、熊本市周辺には三菱電機、都築紡績、興国紡織と進出してまいりましたが、こういう工場がくるに従ってさらに大きな工場がくる気運が高まっています。

八代臨海工業地帯も長いこと足踏みをしていましたが、港湾建設の進捗とともに、分割譲渡の方針が具体化してきて、引き合いがだいぶ出てまいりました。県全体として新産地域の工場進出が活気づいて来つつあることはまちがいないと思えます。そしてこれに伴って地場産業もそれぞれ充実拡張せられつつあります。長い間足踏みをしていた熊本県の新産都市が、その停滞期からどうやら一歩踏み出す気運になってきたことは間違いないと思えます。

県民みんなが手を取り合って

二年程前のことでした。県政にも明るいある国会議員さんが私に向って、「もう新産だ、工場誘致だということはやめて、これから農業と観光だけで立県するというふうな政策転換したらどうか」ということを奨められた時期がありました。私にとっては苦しい時期ではありましたが、県民の中にもこれと同様に考えられた人も多かったこと、しかし農林、水産といったような第一次産業だけでは、どうしても県内に若い人々の足をとどめるといことは困難であります。第一次産業が近代化され、合理化されるに従って、余剰労働力が減り、老齢化してくる。これはここ数年、私もが皆さんとともに膚に感じた体験でした。

県の企画部が昨年暮れにやりました県の人口の将来に対する試算によりますと、昭和六十年には、厚生省は熊本県人口は百二十三万まで減ると、こういうふうな試算をしていますが、企画部の諸君は、そんなには減らん、百六十四万程度でとどまるといふソロバンをはじいてくれました。しかしこれも、熊本県の経済が全国と同じペースで発展していく場合に、百六十四万にとどまるといふ数字であります。熊本県の経済発展が、一次産業だけでは、到底全国ペースに追いつき得ないことは、皆さんにはご了解いただけると思います。どうしても熊本県の県政の衰微を挽回するには、やはり新産都市も推進していかねばならないし、工場誘致にも力を入れていかなければならないのです。そしてようやくその目鼻がついてきたと私は思うのです。

年末年始にあたって、私の感じた所感を申し上げまして、私の年頭のことばに代えさせていただきます。こうして一年もどうぞひとつ県民皆さんとともに、元気でお互い手を取り合って熊本県政発展のためにまい進したいと思えます。

(知事年頭のあいさつより)